

韓国では、お正月とお盆は陰曆に祝う為、もうすぐ秋夕(チュソック、中秋)と呼ばれるお盆を迎えます。毎年、この二つのお祝い日になると、ほとんどの国民はお墓参りに行きますが、特にお盆の場合、当日の2週間前にお墓をきれいにする慣習があります。その日、男性達は先祖のお墓に行き、一年間伸びた芝を刈り、雑草や雑木などを取り除きます。それに使われる道具はただ一本の鎌だけで、実は、その危ない道具がうまく使えなければ、その仕事はできません。私は中学校3年生の時、初めて鎌を手に入れて父からそのやり方を学び、それから高校3年生まで、毎年、父と一緒に3か所のお墓を訪れて、お盆のお墓参りの準備をしました。まだ夏の暑さが残っている季節、その丸一日を、二人はまるでシャワーを浴びたように汗にまみれてあちこちのお墓に参り、その仕事をしました。お墓は別々のところにあったので、山道を通らなければなりません。その細い山道を二人で歩いて次の所へ向かう時、私は父の後について行きながら、いつも父の背中を見つめるようになりました。そして、次のお墓についたら、二人は一言も交わさず静かに芝刈りを始めました。今その時のことを顧みると懐かしい気持ちになります。一方、何か言葉では説明しがたい不思議な気持ちに耽ったりしています。それは、その細い道を通して、私自身が、既に父の人生の大事な時を共にしているかのような、或は、父の心を少し垣間見ているかのような気持ちです。そうです。その細い道の果てには父の大事な命の泉があり、私はその命の現場に招かれ、そこで父と共に働いていたのです。

今日の第1朗読で、エゼキエル預言者は「神様の道とイスラエルの民の道」に関する神様の御言葉を語っています。長い間、特に、王たちの時代の中で多くの罪を犯したイスラエルの民は、神様の道、つまり、信仰の道が自分たちを邪魔するものだと見なしていました。その信仰の道とは、神様が示してくださった道で、それは「正義と恵みの業を行う」ようにと教えている道なのです。言い換えれば、その道は神様の慈しみと憐れみと愛に基づいた道で、その道を歩んだら、不正や悪を行うわけがありません。しかし、イスラエルの民は自分たちを正しくない道に導いていた王たちや偽りの預言者たちに

したがって、神様の道から逸れる結果になってしまったのです。それで、神様の民と呼ばれた彼らの間に、様々な犯罪が行われ、その罪による恨みや妬み、嘆きや憎しみは深まっていて、もはや彼らは神の民ではなく、罪の民となっていました。彼らの目には、この世の中の道は広くて楽に見えましたが、神様の道は細くて暗い道のように見えたのです。神様は彼らのために多くの預言者を遣わされて、彼らを正しい道に導こうとされましたが、もうすでに罪に染まっていた民は神様の道に立ち返ろうとはしませんでした。今日も、神様はエゼキエルの口を通して、すべての人が悔い改めて、罪と悪の道から離れ、死ではなく命を得るようにと勧められたのです。神様は彼らの目に細くて暗い道のように見えた道、つまり、ご自分の慈しみと愛の道が、実は命に至る道であることを彼らが悟り、その道で新たに命を得ることを望んでおられたのです。

今日の福音で、イエス様は二人の息子を持っていたある父親のことを、例え話として聞かせてくださいました。父は二人がぶどう園で働くようにと声を掛けましたが、兄と弟の様子は全く異なりました。その父の指示に対して、兄の答えは「嫌」でしたが、後で彼は心を改めて働きに行きました。一方、弟は口では「はい」と答えましたが、実際には、行かなかったのです。イエス様はこの例え話を祭司長や民の長老たちに話して、最後に「この二人のうち、どちらが父親の望み通りにしたか。」と問われました。それに対して、彼らは兄の方だと答えましたが、それを耳にされたイエス様は、この例え話の結論として、民の指導者であった人たちより、罪びとたちが神様の国に先に入れるとおっしゃいました。その理由としてイエス様が言われたのは、民を導くべき指導者たちが、徴税人や娼婦たちとは逆に、神様から遣わされた洗礼者ヨハネを信じなかったということでした。彼らはヨハネが示した義の道、つまり、神様の慈しみと憐れみと愛の道に立ち返らず、むしろ、罪びとたちが先にその神様の道に戻ってきたということです。

わたしは今日の福音を黙想しながら、次のことを考えてみました。それは、どうして指導者たちでは

なく、<sup>つみ</sup>罪びとたちが<sup>あに</sup>兄に<sup>たと</sup>例えられたのかということです。<sup>じじつ</sup>事実、<sup>さま</sup>イエス様は<sup>つみ</sup>罪びとを<sup>あに</sup>兄に、<sup>しどうしや</sup>指導者たちを<sup>おとうと</sup>弟に<sup>たと</sup>例えられましたが、それはその<sup>ちちおや</sup>父親の<sup>えん</sup>ブドウ園を受け<sup>う</sup>継ぐのは<sup>だれ</sup>誰かということをはっきり<sup>しめ</sup>示すためでした。<sup>ふつう</sup>普通、その<sup>けんり</sup>権利は<sup>ちやうなん</sup>長男にあるはずですが、<sup>さま</sup>イエス様はこの<sup>はなし</sup>話を通して、<sup>かみさま</sup>神様の<sup>いこう</sup>意向に沿って<sup>い</sup>生きる人こそが<sup>ちやうなん</sup>長男となることを<sup>めいかく</sup>明確にされたのです。それで、<sup>じぶん</sup>自分たちは<sup>かみさま</sup>神様の<sup>ちやうなん</sup>長男のような<sup>そんざい</sup>存在だと<sup>かんが</sup>考えていた<sup>しどうしや</sup>指導者たちは、<sup>じっさい</sup>実際には<sup>ちやうなん</sup>長男でなく、<sup>じなん</sup>次男であり、しかも、<sup>かれ</sup>彼らはいつも<sup>かみさま</sup>神様に<sup>そむ</sup>背いていると言うことを、この<sup>たと</sup>例え話によって<sup>あき</sup>明らかにされたのです。また、<sup>さま</sup>イエス様はこの<sup>きょう</sup>今日の<sup>ふく</sup>福音を通して、<sup>だれ</sup>誰も<sup>じぶん</sup>自分の<sup>みち</sup>道に<sup>こたわ</sup>拘らず、その<sup>みち</sup>道から<sup>はな</sup>離れて<sup>かみさま</sup>神様の<sup>みち</sup>道に<sup>た</sup>立ち返るならば、<sup>かみさま</sup>神様の<sup>くに</sup>国を受け<sup>う</sup>継ぐ<sup>ちやうなん</sup>長男となることをはっきり<sup>おし</sup>教えてくださいました。

それは、<sup>しと</sup>使徒パウロの<sup>きょう</sup>今日の<sup>だいにろうどく</sup>第2朗読にもよく<sup>しる</sup>記されています。<sup>きょうかい</sup>パウロは<sup>ひと</sup>教会の人たちに、<sup>あい</sup>愛と<sup>いつく</sup>慈しみと<sup>あわ</sup>憐れみの<sup>こころ</sup>心をはな<sup>みな</sup>話しながら、<sup>おな</sup>皆が、<sup>あい</sup>同じ<sup>だ</sup>愛を抱き、また、<sup>こころ</sup>心を<sup>あ</sup>合わせ、<sup>おも</sup>思いを<sup>ひとつ</sup>一つにすることを<sup>すす</sup>勧めています。<sup>あわ</sup>併せて、<sup>みな</sup>皆、<sup>り</sup>利己心や<sup>きよえいしん</sup>虚栄心を<sup>す</sup>捨てることと、<sup>たが</sup>へりくだること、また、<sup>あいて</sup>互いに<sup>じ</sup>相手を<sup>ぶん</sup>自分よりも<sup>すぐ</sup>優れたものと<sup>かんが</sup>考えること、<sup>じぶん</sup>自分だけではなく<sup>たにん</sup>他人のことに<sup>ちゅうい</sup>注意を<sup>はら</sup>払うことについても<sup>げんきゆう</sup>言及しています。<sup>ぶん</sup>パウロにとって、それは<sup>さま</sup>イエス様に<sup>なら</sup>倣うことで、<sup>さま</sup>イエス様は<sup>かみさま</sup>神様と<sup>ひと</sup>等しい方でありながらも、その<sup>すべ</sup>全てを<sup>す</sup>捨て、<sup>かみさま</sup>神様の<sup>しもべ</sup>僕となり、その<sup>けんそん</sup>謙遜な<sup>すがた</sup>姿こそ、<sup>きょうかい</sup>教会の<sup>ひとびと</sup>人々の<sup>しん</sup>真の<sup>ようす</sup>様子だと思っていました。<sup>さま</sup>イエス様もご<sup>じぶん</sup>自分の<sup>す</sup>全てを<sup>す</sup>捨てたのに、<sup>きょうかい</sup>教会の<sup>ひとびと</sup>人々が、<sup>じぶん</sup>自分の<sup>かんが</sup>考えややり方、<sup>けいけん</sup>経験や<sup>ちしき</sup>知識などの<sup>じ</sup>自分の<sup>みち</sup>道に<sup>こたわ</sup>拘ってはいけません。その<sup>みち</sup>道の<sup>は</sup>果てには<sup>いのち</sup>命ではなく、<sup>つみ</sup>罪と<sup>し</sup>死の<sup>かげ</sup>影が<sup>ま</sup>待っているかもしれ

れません。  
さて、<sup>きょう</sup>今日の<sup>ふくいん</sup>福音の<sup>たと</sup>例え話ですが、<sup>あに</sup>きっと、<sup>えん</sup>兄はその<sup>いた</sup>ブドウ園に至る<sup>みち</sup>道で<sup>ちちおや</sup>父親に<sup>であ</sup>出会ったと思えます。<sup>ちち</sup>父はそこで<sup>ふたり</sup>二人の<sup>むすこ</sup>息子を<sup>ま</sup>待っていたに<sup>ちが</sup>違いありません。<sup>むすこ</sup>息子たちと共に<sup>とも</sup>働きたかっただけでしょう。<sup>きょうかい</sup>教会への<sup>みち</sup>道にも、<sup>かみさま</sup>神様が<sup>わたし</sup>私たちを<sup>ま</sup>待っておられ、<sup>かみさま</sup>神様は<sup>わたし</sup>私たちと共にその<sup>みち</sup>道の<sup>は</sup>果てであるこの<sup>きょうかい</sup>教会で、また、<sup>ひび</sup>日々の<sup>わたし</sup>私たちの<sup>せいかつ</sup>生活という、もうひとつの<sup>きょうかい</sup>教会でも共に<sup>とも</sup>働きたいと思っておられます。その<sup>かみさま</sup>神様

の御心<sup>みこころ</sup>を心<sup>こころ</sup>に留<sup>と</sup>めて、これからの私<sup>わたし</sup>たちの働<sup>はたら</sup>きによって、多<sup>おお</sup>くの人<sup>ひと</sup>が命<sup>いのち</sup>の道<sup>みち</sup>を見出<sup>みいだ</sup>すことができる  
ように努力<sup>どりよく</sup>しましょう。わたしもこのミサの中<sup>なか</sup>で、そういう恵<sup>めぐ</sup>みをお祈<sup>いの</sup>りいたします。